

被服製作の意欲と関心を高めるための題材の工夫

——子ども服製作を通じて——

佐々本 恵 万*

Teaching Strategies to Improve Students' Motivation and Interest in Clothing Making

—— From Making Children's Clothing ——

Ema SASAMOTO

Key words : 被服製作 clothing making, 子ども服 children's clothing

1. はじめに

コミュニティ生活学科では1年次に「アパレル製作実習」を開講しているが、近年、受講者の知識・技能の個人差の拡がりが増著しく、創作意欲の喚起や維持に難しさを感じている。

高等学校普通科において、家庭科で被服製作を扱うことが少なくなっており、小・中学校においてもバッグなどの小物製作にとどまっていることが背景として考えられる。作ることよりも、選ぶことに焦点を当てることは重要だが、被服の構成や工程、縫製の難しさを知ること、選ぶ際の価値基準となり、豊かな衣生活の指針になると考えられる。また、アパレル関係の職業に就きたいと考える学生には、身につけなくておこなねばならない知識、技能があるため、短期大学での2年間でそれらを効率的かつ主体的に学習させる必要がある。一方、専門学科のある高等学校で家庭科を履修した学生は、スーツや浴衣などの製作経験を持って入学している。基礎的な題材では彼らの知識や技術を生かせず、「学びたい」という意欲を喚起することは難しいため、時間を持て余し無為に過ごさせてしまう恐れがある。したがって本講座で扱う題材は、学生一人一人の能力や経験値に個人差があることを考慮し、基礎基本を押さえたうえで発展性のある題材が良いと考えた。

本研究ではアパレル製作実習において、子ども用ワンピースという題材を用い、学生の意欲と関心を高める工夫について検討した。

2. 授業とアンケート

2-1 対象および製作時期

対象学生は短期大学1年生18名、製作は2019年前期「アパレル製作実習」で実施した。

2-2 授業計画

[授業の目標]

アパレル製作の用語や用具、材料などの基本的な知識を理解するとともに、採寸、裁断、ミシン縫いなどの基礎的な技術を身につけ、関心を持って主体的に取り組むことを目標とした。

[授業内容]

第1回(4/12)：製作実習の目的と意義を理解した。

第2回(4/19)：子ども服の特徴と要件についてディスカッションし、デザインを工夫した。

第3回(4/26)：各自のデザインに合わせて型紙を作った。

第4回(5/10)・第5回(5/17)：裁断、印付け、縫い代の始末の方法、手縫いの演習、ミシンの使い方など、本縫いのための準備の仕方を理解した。

第6回(5/24)：ポケットの種類とつけ方について理解した。襟ぐり見返しの目的を理解し、見返しを作った。

第7回(5/31)：ギャザーを寄せるためのぐし縫いの方法を理解し、必要な個所にぐし縫いを施した。前身ごろと後ろ身ごろの肩を縫い合わせた。

第8回(6/7)：身頃に見返しをつけた。カーブの縫いしろには切り込みを入れる必要性について理解した。ステッチで押さえることで見返しが落ち着くことに気

* 広島文化学園短期大学コミュニティ生活学科

付いた。

第9回(6/14)・第10回(6/21):パイヤステープの役割と作り方、つけ方について理解した。袖ぐりをパイヤステープでくるんだ。袖をつけたい場合どのようにすればよいか理解し、袖を作って縫いつけた。

第11回(6/28):まつり縫いについて別布で練習し、パイヤステープを身頃にまつりつけた。

第12回(7/5):脇縫い、裾縫いの方法について理解し、デザインの工夫を取り入れながらワンピースの形を完成させた。

第13回(7/12):スナップのつけ方について理解し、後ろ身ごろに縫い付けた。

第14回(7/19):美しく仕上げるための糸の始末やアイロンがけを実践した。余った時間でできる装飾はないか考え、時間いっぱい取り組んだ。

第15回(7/26):作品をディスプレイし、自己評価した。

2-3 アンケート内容

工夫の成果を見るために3種のアンケートを実施した。

①縫製経験についてのアンケート

②縫製技術や用語、用具の理解度アンケート

③完成後の感想

実施時期に関しては①は事前に、②は事前と事後に、

③事後に行った。

各項目の質問文は以下のとおりである。

①縫製経験についてのアンケート(事前)

1. 中学校家庭科の衣生活に関する実習について何を作ったか、記入しよう

2. 高等学校家庭科の被服製作について何か作ったか記入しよう(作っていない場合は「作っていない」を選択)

②縫製技術や用語、用具の理解度アンケート(事前・事後)

1. 次の用具について、使い方がわかるものには○、知っているが使えないものには△、知らないものには×を記入しよう

【ルレット/チャコペーパー/ロックミシン/リッパー/テープメーカー】

2. 次の縫い方について説明を聞かなくても縫えるものには○、少し説明があれば縫えるものには△、縫い方がわからないものには×を記入しよう

【しつけ縫い/ぐし縫い/三つ折り縫い/まつり縫い/返し縫い(ミシン)/スナップ付け】

3. 次の用語について衣服のどこの部分か、どういう意味か、など、説明できるものには○、なんとなくわかるものには△、わからないものには×を記入しよう

【前身ごろ/後ろ身ごろ/見返し/襟ぐり/袖ぐり/わき/すそ/肩/わ/耳】

③完成後の感想(事後)

質問文:この実習でどのような知識や技術が身に付きましたか、また、この実習でどのようなことに達成感を感じましたか。今後、どのような技術や能力を身に付けたいと思いましたか。あるいは身に付けた技術をどう生かしたいと思いましたか。

3. 製作意欲を高める工夫

3-1 デザインの工夫

学生の金銭的負担感を軽減するため1メートルの用布でできる子ども服として、2歳児用のノーカラーのAラインワンピースを基本形とした。その構成は、前身ごろ1枚、後ろ身ごろ2枚で、前身ごろにポケットを付ける形にし(写真1)、スナップによる後ろ開きとした。

この基本形をもとに、展開した形を2種準備した。まず、第1段階として、基本形にフリル袖をつけた形のもの(写真2 以後フリル形と呼ぶ)、次に第2段階として胸の下で切り替えてスカート部分にギャザーを寄せたもの(写真3 以後ギャザー形と呼ぶ)を用意した。ギャザー形ではポケットを省略しても良いこととした。

3-2 デザイン説明の工夫

画一的なデザインよりも「自分でデザインした」と感じることが出来るもの、唯一無二と感ぜられるもののほうが製作意欲を高めるのではないかと考え、基本形、フリル形およびギャザー形から1つデザインを選択したうえで、「何か一つ自分なりのデザインを加えよう」と促した。

デザインの段階で、フリル形やギャザー形のそれぞれのディテールに必要な技術や時間を、サンプル(写真4)などを用いて説明した。また、リボンや飾りボタンなど、完成間近に後付できるディテールがあることも説明した。そのうえで、製作経験のない学生には基本形を選択してはどうか、経験豊富な学生にはギャザー形にチャレンジしてみてもどうか、などの助言をおこなった。

学生からは、3つの形以外にも多くの要望が出された。例えば、裾や襟ぐりにレースやフリルをつけたい、袖のフリルを2段にしたい、二種類の布を使いたい、ポケットの形を変えたい、スカート部分をティアードにしたい、レース布を重ねたい、フラットカラーをつけたい、パフスリーブをつけたいなどであった。どのような物を縫ったことがあるかにより、またそのデザインの難易度やかかる時間、コストなどを説明しアドバイスや提案を行った。縫製の経験がなく「かわいいワンピースにしたいが技術に自信がない」という学生には、柄や素材、ワンピースのリボンなどで「かわいらしさ」を表現できることを、サンプルを示して説明した。一例として、「被服製作は初めてだがどうしても襟をつけたい」という学生には、市販のレースを襟風につけることを提案した。



写真1



写真2



写真3



写真4

3-3 実習指導の工夫

実習指導をするにあたっての工夫は、次の2つであった。

①段階標本を用意し、学生がいつでも手に取って調べられるようにした。

②全体指導の後、机間巡視で個別指導しつつ、進度の早い学生や縫製経験のある学生には他の学生への援助を促した。援助している学生、標本やプリントを活用している学生に対し肯定的な声かけをした。また、個別指導の際には「ギャザーが均等に寄せられたね」「まつり縫いの目が細かくてきれいだね」などの声かけをした。

4. アンケート結果

4-1 縫製経験についてのアンケート

表1の下段に「縫製経験」として結果を示した。アンケート結果より、学生を次の2グループに分けた。

高校家庭科でシャツ、ドレス、スーツ、浴衣などを製作している学生（番号1、2）と甚平やハーフパンツを製作したことのある学生（番号3～9）をAグループとし、エプロンやバッグなどの小物以外製作したことがない、つまり被服製作の経験がない学生（番号10～18）をBグループとした。このことから本学入学前の各学生の縫製経験に差があることがわかった。

4-2 縫製技術や用語、用具の理解度アンケート

表1に結果を示し、完成した学生の作品を写真5～7に示した。「用具の使い方」「縫い方」「衣服部位説明」の



写真5



写真6



写真7

それぞれの項目に対し、各学生（番号1～18）それぞれ実習の前・後の回答を○△×で示し、○は2点、△は1点、×は0点として集計した。

縫製技術、用語・用具の理解について次のことがわかった。

実習事前の特徴として、①実習前の理解度を点数化したところ、縫製経験のある学生9名の平均は33.7、経験のない学生9名の平均は17.4であり、大きく差があることがわかった。②Aグループの中で経験が豊富な学生は、基礎的な知識を身につけており、Aグループの学生の多くは、ぐし縫い、三つ折り縫い、返し縫いなどの縫い方を知っていたが、Bグループの学生は知らない、自信がない、と答えている。③Bグループは、ルレット・チャコペーパー・ロックミシン・リッパーなどの用具、前身ごろ・後ろ身ごろ・見返し・襟・袖ぐり・わき・すそ・肩などの構成部分の名称の認知度が低い。④返し縫いは全員が知っていた。

実習後の理解度は、全ての項目において理解度が高まり、縫製経験のある学生の平均が41.0、経験のない学生の平均が40.8となっており、実習によって、経験の有無による理解度の差が大幅に縮まったことがわかった。

4-3 完成後の感想

「完成後の感想」を下記に列記した。

- ・ロックミシンなど、普段使わない用具の使い方が分かった。
- ・スナップをきれいにつけることができ達成感を得られた。
- ・ギャザー寄せなど、初めてのことが多く、技術をたくさん身につけることができた。
- ・服を作ることについての知識や縫い方などが身についた。まつり縫いやギャザーなど、今までやったことの無いこともできるようになったので今後服を作るときに使いたい。
- ・ただ切って縫うだけではなく、縫い目が表に出ないようにするなどの技術が身についたと思う。
- ・服を作る順序がわかった。
- ・最初はあまり部分の用語がわからなかったが今は少しわかるようになった。
- ・衣服の部位の名称や縫い方がわかった。
- ・高校時代でいろいろ作ったことを思い出すことができた。自分でデザインしたものを作ることができてうれしい。
- ・スナップをきれいにつけることができ達成感を得られた。次は自分が着られる服を作りたい。
- ・ワンピースにフリルがついていくごとに達成感を感じた。
- ・作品を1枚の布から作るのは非常に大変で難しかったが、よく頑張ったと思った。
- ・今までやったことの無いこともできるようになったので今後服を作るときに使いたい。
- ・シンプルな服を作ったので次は袖などをつけて頑張りたい。冬服など、厚手の生地を使ってみたい。
- ・作れるのか不安だったが、ひとつひとつの部分ができていくごとに達成感を感じた。
- ・今後もいろいろなものをつくってみたい。手縫いのクオリティーをもっと上げていきたい。

- ・見映えよくきれいに縫えている、と実感した時に達成感を得られた。
- ・次はパンツやドレスなど自分の服を作りたい。
- ・将来、ドレスなどの衣装を扱う仕事に就いて、身につけた技術を生かしたいと思う。
- ・バイヤステープを用いた袖ぐりの縫いしろの始末が難しかったが、難しいからこそできた時の達成感があった。
- ・自分で考えて製作できたのがうれしかった。将来自分の子どもに作ってあげたい。
- ・今回は袖をつけなかったもので、次は袖付けまでやりたい。

以上のように、感想文中に用具・知識・技能に関する記述が多数あり、子ども服の製作を通し知識が身についたことがわかった。

写真5～7は学生作品である。

考 察

本研究では、被服製作の意欲と関心を高める題材として、子ども服製作とそのデザイン、指導方法を検討した。縫製経験の有無によって生じる知識・技能の差を前提とした題材として、この子ども用ワンピースは適していたと考える。

今回、実習の前に「縫製経験についてのアンケート」および「縫製技術や用語、用具の理解度アンケート」を取ったことで、道具の名称や使い方の認識の度合いである程度被服製作経験の有無が推し量れそうだと分かり、また、被服製作の経験の有無によって縫い方の詳細な説明や示範の必要性を知ることができ、指導に生かすことができた。

実習後のアンケート結果の数値より、基礎的・基本的な知識・技術を身につける題材として適当だったと考える。実習後の感想の文中に被服製作用語や用具名が見られたことから、知識の定着がうかがえる。前述の完成後の感想に示すように、縫製経験が豊富な学生の感想に

も、「自分でデザインしたものが作れて嬉しい」とあり、やりがいや達成感を得ることができていたと考える。

今後も学生の状況を把握しつつ柔軟に対応できる題材を精査しなければならない。また、デザイン展開の幅が広がれば必然的に個別指導が多くなり、受講者の人数によっては対応しきれなくなることも考えられる。今後は動画による作り方の提示なども検討したい。

今回の反省点としては、素材についての説明不足により、学生が製作途中で「イメージと少し異なる雰囲気になった」「縫いづらい」と訴える場面があった。今後は生地を選択についての指導と、そのための教材を検討課題としたい。

ま と め

本研究では、被服製作の意欲と関心を高めるための題材として、子ども服製作とそのデザインの工夫、指導方法を検討した。

実習前に行ったアンケートにより、各学生の縫製経験、縫製技術や用語、用具についての理解度に差があることがわかった。それを踏まえ、ワンピースのデザインを経験や能力に応じて選択できるようにし、選択したワンピースに自分なりのデザインを施したものを製作できるようにした。完成後、再びアンケートを実施し、理解度の変化と達成感について調査した。その結果から、縫製について理解度が高まり、縫製経験の有無による理解度の差が縮まったことがわかった。また自分自身でデザインを工夫したこと、できなかったことができるようになったことで被服製作に対する意欲と関心が高まったことがわかった。

謝 辞

本研究実施にあたりご協力いただいた、広島文化学園短期大学コミュニティ生活学科教授 今井裕子先生に感謝いたします。

Summary

The present study, using the making of children's clothing as the subject of learning for improving students' motivation and interest in clothing making, examined a teaching method that allowed personal alterations in designs of children's clothing.

A questionnaire was carried out with students before class and revealed varying levels of sewing experience and skills, as well as varying extents of understanding of technical terms and sewing tools. Considering this result, the students were allowed to choose from different dress designs depending on their experience and/or skills and make personal alterations in the chosen designs. After the dress making, an additional questionnaire was conducted to evaluate changes in the students' understanding and their sense of achievement. The result showed improvement in the understanding of sewing and reduction of the variation in the extent of understanding that had been caused by the varying levels of sewing experience. Also, according to the questionnaire, making their personal alterations in the dress designs and acquiring a new skill improved the students' motivation and interest in clothing making.